

地名真駒内の由来

アイヌの失われた地理的認識

切替英雄



図1 真駒内川*1

札幌を流れる石狩川水系豊平川の支流、真駒内川は美しい川だ。

この川の名（マコマナイ）は、松浦武四郎^{たけしろう}の日記*2に現れる。戊午（安政五年）2月8日（陽暦1858年3月22日）、噴火湾（内浦湾）沿岸ウス（有珠）を出て、現在の中山峠を越え、サツホロ（豊平川）に降り、石狩川本流に至る条である（p.75）。かんじきを履き、固雪の上を歩くこの踏破に十日余りを要している。この区間の案内人^{ガイド}は、アブタ（虻田）のアイヌ4名（ト子ンバク、エナヲテキ、シヨウロク、トベヲク）、虻田近傍のウス（有珠）のアイヌ2名（コロク、イカシハコロ）、それにアンパロという「若ゐもの」の7名である

*1 札幌市南区真駒内柏丘10丁目、図5①より。白い建物は柏丘8丁目。奥に見えるのは藻岩山。

*2 秋葉実解説『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』上、北海道出版企画センター、昭和60年、p.75。

から (pp.39-40)、*³ そのいずれかの口から出たものを武四郎の耳が捉えたアイヌ語の川の名であるに違いない。

アイヌ語地名研究は、いうまでもなくアイヌ語地名を研究対象とする。しかし、当のアイヌ語地名が本来どの地点を指すものであったか、また、アイヌの誰が言って、誰がそれを聞いて文献・地図に記載・登録したのか不明な場合、また、本当にアイヌの間で使われていた地名なのかさえ疑わしい場合も多い。このような次第で、アイヌ語地名研究には、ときに何を相手にしているのか確信を抱かせない、学としての根本的な危うさがある。それはともかく、この名は真正のアイヌ語地名といえるが、その由来(地名の意味)について誤った説が流布していると思われるので私の考えを述べる。

たとえばインターネットのあるサイトでは、マコマナイが

山の奥から流れてくる川

と説明されている。^{*4} このような説は、山田秀三のいわゆる受け売りで、もと山田秀三が『札幌のアイヌ地名を尋ねて』(楡書房, 昭和40年)で立てたものだ (pp.128-9)。豊平川の支流はどれも短い、真駒内川だけは「特別に」長い。「無闇に奥深い山から流れている川」とも地図をご覧になった印象をしるされている。そこで、永田方正が『北海道蝦夷語地名解』(明治23年)で示した

マク オマ ナイ 後背を流る川

という地名の意味を「マク・オマ・ナイ 山の方・にある^{*5}・川^{*6}」と解釈さ

*³ このほかに犬を5匹連れる。

*⁴ 「真駒内」をキーワードとして検索した。

*⁵ オマは「～が～に存在する」という意味の、存在するものを主語に、存在する場所を目的語にとる存在を表す二項動詞(他動詞)で、ここではその主語にあたるものナイ「川」を修飾して。

*⁶ アイヌ語には、日本語の「川」に相当する二つの語があるといわれる。ベツ pet とナイ nay。しかし同義ではない。ベツは川の水の流れを指し、水の流れが開析し刻んだ大地の

れた。これは、知里真志保が『アイヌ語入門』『地名アイヌ語小辞典』（いずれも昭和 34 年刊）などで、また、生前、山田にたびたび口頭で、sa「前」「浜の方」に対して mak は「後」「山の方」である、と述べたことに従われたためでもある。



図 2 沿岸部での mak（知里の説）

さて、知里の述べたこと（図 2）は、海に臨む一帯ではおそらく当たっていたのだろう。先頃翻訳した金成マツ（1875-1961）が伝承し、みずから英字でしるしたシノッチャ風の叙事詩に次のような詩句がみられた。^{*7}

Hemakashi wa	炉の後ろへ（炉の mak へ）
ku-shikiru ko	振り向くと
ku-ebituntunke	くすくす、くっくと
ku-ebikitkitche.	忍び笑いをした。
Hesashi wa	炉に向いて（炉の sa に向いて）
ku-shikiru ko	直り
rai kum be tashmak	おかしさにもう死にそうにあえいで
rai kum be hese	いまわの吐息を
ku-ki kane	漏らした。

炉の前に座る女が忍び笑いをする情景だ。アイヌは炉を海に喩えるから、炉

筋、つまり谷・沢をナイをいう。山あいのナイを流れる沢水は pon pet（沢井トメノ）と呼ばれる。川の名は何らかの理由で、「幌別」のように時に水の流れにもとづき、「幌内」のように時に大地の筋にもとづき付けられる。

^{*7} 切替英雄訳「金成マツ筆録アイヌ英雄叙事詩シノッチャみだらごとにふける女の歌」アイヌ民俗文化財・ユウカラシリーズ 41. 北海道教育委員会. 平成 24 年 3 月. pp.15-16. シノッチャとは節のついた即興の語り物。分綴、改行、ピリオド、朱字、大文字・小文字の区別および日本語訳は切替のもの。

に対して座り、前を sa といい (he-sa-(a)shi 「浜手へ」、後ろを mak といったことが (he-mak-ashi 「山手へ」) この叙事詩から知られる。

しかし、内陸部で知里説に従うことは誤りであって、そこでは mak の反対方向は sa ではなく ra [ra] である (図3)。



図3 内陸部での mak

川 pet に向かって前方、つまり川岸方向が ra で、*⁸ 背の方向が mak となる (図4)。川に対して垂直な二つの方向が ra と mak だが、このほかに、川に沿っての、つまり川に対して平行の方向というものが考えられる。それには川上向きと川下向きの二つがあって、それぞれ péna 「川上」と pána ないし sa 「川下」で示される。

pis [pi:] 「浜」と kim 「山」も方位語彙に含まれるが、ほかの語とは異なり、河川存在を前提とするものではない。ほかの語は、方向指示のために河川を基準線としている。また、この語彙体系は sa の反義語を欠いている。

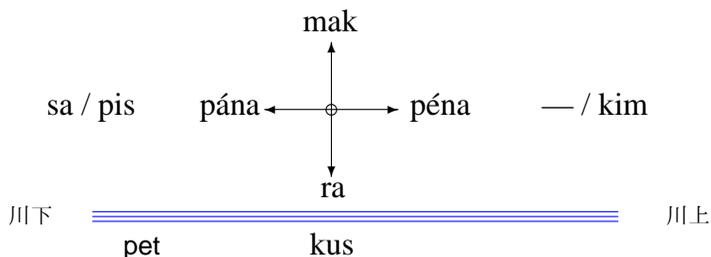


図4 アイヌ語の方位

mak は、よほど広大な平野の中を流れる川でない限り、すぐに標高が高まり、たいてい山になる。たとえば豊平川左岸*⁹では藻岩、円山、三角山、ま

*⁸ ただし、川向こうまで行くと ra ではなく kus [ku:] となる。

*⁹ 左岸・右岸は川下に向かっていう。

た手稲山などとなる。kim は上流の山だから、たとえば豊平川では定山溪の山々がそれにあたる。したがって、日本語に訳すと mak も kim も同じく「山手」になってしまう場合が多い。しかし、今や mak と kim の違いははっきりしている。ただこの違いは、私がアイヌ語十勝方言の分析を進めているときに気づくまでは地名研究者に知られていなかった。図4「アイヌ語の方位」で示した方位名称の体系は、私のアイヌ語の師のお一人であられた十勝本別のアイヌ、沢井トメノ（1906-2006）の言語を調べているうちに明らかになった（1970年代）。沢井トメノはおそらく十勝地方のアイヌ語の最後の話し手だった。

mak に対応する概念が日本語にないのも mak の正しい意味の発見が遅れた原因だと思う。知里真志保や山田秀三、特に知里は mak と kim の違いを自覚しないままに mak を「うしろ」「山手」「奥」「山の方」などと訳している。永田方正が明治23年の地名解で示した「後背」という訳語が実は一番的確だが、お二人には永田の伝えたかった「後背」の意味が察せられなかった。

定山溪の山々を東へと流れる豊平川を下るとき、定山溪温泉の下流からその左岸（北側。砥石山・硬石山側^{かたいしやま}）は歩くことができない。しばしば険しい断崖が川岸に迫っているからだ（図5）。だからアイヌは右岸（南側）を歩いたに違いないが、やがて定山溪の谷を抜け出ると、川はすぐに真駒内の柏丘にぶつかり、向きを北へ変える。すると今度は右岸が歩けなくなる。柏丘の断崖が迫っているからだ（図6）。そのため、さらに川を下っていくためには一旦柏丘の鞍部（石山陸橋のあたり）を乗り越えてこの難所を回避する必要がある。確かに豊平川を徒渉する手もあった。武四郎は戊午（安政五年）2月19日（陽暦1858年4月2日）現在の藻南橋^{もなみ}②付近で徒渉している。^{*11}

^{*10} 朱の線は標高200mの等高線。柏丘とその南方の丘を囲む黒線は標高100mの等高線。右岸、川沿いの点線は推定されるアイヌの道。二つの赤い矢尻①②は、それぞれ図1、図6の写真撮影の地点およびカメラの向きを示す。国土地理院5万分1地形図「札幌」（NK-54-14-10昭和62年修正）と「石山」（NK-54-14-11平成3年修正）を資料として作図した。）

^{*11} 秋葉『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』上、p.75。



図5 豊平川と真駒内川*10

しかし、このあたりは水量が多くかつ流れが急だ。渇水期ないし結氷期でなければ渡るのは厄介だ。武一郎が渡ったのは、まだザイ（川の氷）が川面を覆っていて動かない時期だったと思われる。写真（図6）の豊平川は藻南橋②から撮ったものであるが、水道水を得るため上流で取水され、それを札幌市民がぎぶぎぶ使っているため、かつての豊かな水量を示すものではない。現在「おいらん淵」と呼ばれ、当てにはならないけれど、かつておいらんがここに入水したという話があるが、その面影もない。



図6 柏丘にぶつかる豊平川^{*12}

柏丘の鞍部を越えると遠く南方の空沼岳山腹^{ばんけい}の万計沼を源とする真駒内川が流れている。^{*13} この川は柏丘の背後を巡って今の真駒内公園の北端で豊平川に合流しているから、これを下って行くと、再び豊平川の流りに沿うことができる。

豊平川は真駒内川と合流するあたりからその直列的な流れが混沌となり、複雑に分流し、広大な扇状地^{*14}を形成し、伏流水をうみ、辺縁において美

^{*12} 藻南橋②より。奥に見えるのは藻岩山

^{*13} 武四郎の日記にはマコマナイが「水源サツホロ山の尾の処より来る」と書かれている。「尾(お)」とは山裾のことであろう。アイヌが空沼岳をサツホロ(豊平川)の水源 *etoko* と認識していたとは思えない。したがって「サツホロ山」という山名は奇妙である。また、ガイドの7名のアイヌが万計沼を知らなかったのかどうか、疑問は尽きない。

^{*14} 完新世に形成されたいわゆる札幌面。大丸裕武「完新世における豊平川扇状地とその下流氾濫原の形成過程」『地理学評論』62A、pp.589-603。大丸氏の論文は北海学園大学同僚の高橋伸幸氏より紹介された。伏して感謝する。

しい湧き水を出現させる（北大植物園の池など）。すなわち扇状地に特有な、渇水期には「乾いて」細くなり、融雪期・降水時には「大きくなる」川（サツ・ホロ sat-poro）となる（sat「乾く」、poro「大きくなる」）。*15 北海道の首府はその扇状地の上に建設された。

豊平川は、中山峠を越えて虻田・有珠に抜ける往時の重要なルート、すなわち石狩川流域・日本海沿岸地方と虻田、有珠など太平洋沿岸地方を結ぶルートの日本海側）だったが、その岸辺を伝い上り下りするアイヌは、真駒内川が豊平川の mak にある川と認識していたに違いない。

柏丘の鞍部を越える道は今日でも重要な交通路だ。先に触れた石山陸橋*16 はここにあり、その下は、かつての定山溪鉄道線（1918-1969）の跡を、今では定山溪・中山峠へ向かう車が通っている。

「真駒内」の意味だけが、つまり豊平川をたどった往昔のアイヌの地理的認識だけがアイヌ語の衰退とともに忘れられたのである。

みほとけになられた

十勝地方のアイヌ語の最後の話し手、農婦沢井トメノ様と
最期まで透明な精神を維持されたアイヌ地名学の山田秀三先生、
北海道大学での言語学の師、ツングース語学の泰斗池上二良先生、
慶應義塾高等学校文芸部顧問、能楽研究家長尾一雄先生

および御内室之子様、

先鋭なアルピニスト、小樽 GCC 代表山西敏彦氏、

先考医学博士切替弘雄およびその妻節子、

先妻農学博士切替眞智子に

「真駒内」というアイヌ地名の由来を解明したこの小文を捧げる

私 家 版

2012年10月13日

005-0022 札幌市南区柏丘9丁目3番7号

切替英雄 

*15 今の豊平川は河川改修を施され、扇状地においてもただ一本の流れにまとめられている。なお、散見するがサツポロを「乾いて大きい（川）」と訳すのは誤りである。それは「細くて太い」というに等しい。

*16 真駒内川に沿って空沼岳へ、また、分岐して支笏湖へ向かう道に続く。